

お知らせ

今まで月一回発行してきましたが、最近ほまったく気分がでるには少々忙しくなつたので、今後はもっとじっくりペースで発行したいと思います。どうぞご愛顧のほどよろしくお願いいたします。

参考文献「弓矢の歴史を語る」大木賢三、「日本武道辞典」笹間良彦、「弓馬と名将」斉藤直芳、「源平合戦の虚像を剥ぐ」川合康、「謎とき日本合戦史」鈴木真哉、「全日本弓道連盟教本」、神戸市文書館HP「源平時代の攻撃用の武具」近藤好和

第37号

購読 無料

不定期発行・櫛に関する情報求ム!
福岡県久留米市田主丸町で活動中!
編集・発行 松山櫛復活委員会
幹事・矢野真由美

松山櫛便り

耳納山の片隅で失われてしまった櫛紅葉の景観を復活させることを目的に、櫛の素人がまったりとその様子を伝えていく会報です。

ブログ公開中「松山櫛復活奮闘日記」<http://blog.goo.ne.jp/elster/> 連絡先 e-mail : elster@mail.goo.ne.jp
ホームページ「松山櫛復活委員会」(櫛便りのバックナンバーあり) <http://www.webn-design.com/~mhaze/>

弓の素材としての櫛 その4

源平時代の大鎧に見る 櫛を使った弓の威力

義経の弓伝説

岩手県紫波町赤沢地区には源義経が使っていたとされる伝説の弓道具が残されています。弓を保管してきた大角家の屋号は判官堂。同地区でも最も古い旧家です。

伝承によると、奥州藤原氏の元にかくまわれた義経が、この大角家の近くで集団騎馬訓練と弓を練習し、やがて同家の娘と恋仲になり、子供ができた関係から、義経が壊れた弓を娘に与えたといふもの。その弓は漆が塗られています。が、芯に用いているのは櫛だと推測されています。

弓を使った馳組み戦とは

平安末期、櫛を芯に用いた伏竹弓が登場し、格段に威力を増した日本の弓。当時の戦闘は馬を走らせながら弓を引く馳弓(はせゆみ)が主でした。実際にはどういった戦いが行われていたのでしょうか。

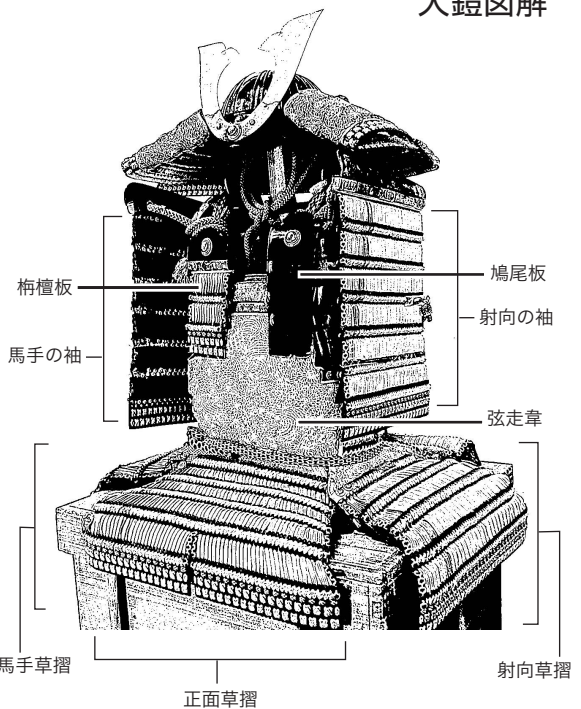
「延慶本平家物語」第二末には、三浦義明の孫・和田義盛が初めて体験する「馳組み」戦への心構えを歴戦の老武者三浦真光に尋ねる場面が描かれています。

「軍(いくさ)にあうは、敵も弓手(ゆんで)、我も弓手に逢わんとするなり。打解(うちとけ)弓を引くべからず。空き間を心に懸けて、振り合わせ振り合わせして、内甲(うちかぶと)を惜しみ、徒矢(あだや)を射じと矢を矧(は)げながら、矢を惜(たば)い給うべし。矢一つ放ちては、次の矢を忽(いそ)ぎ打くわせて、敵の内甲を御意に懸け給え。」

戦いに工夫された大鎧

当時着用された大鎧には、いかに強力な弓箭から防御し、かつ自分もその強力な弓箭を使えるかという工夫がこらされています。いくつか見てみましょう。

大鎧図解



大袖

肩から上腕部を防御する楯状の部品。左の袖を射向(いむけ)の袖、右の袖を馬手(めて)の袖と呼び、敵対する左の袖の方を堅牢に作っている。

鳩尾板 (きゅうびのいた)・梅檀板 (せんだんのいた)

弓を射る時に開く脇と胸部を防御する楯状の部品。右脇が梅檀板、左脇が鳩尾板。右の梅檀板は、弓を引く際に屈伸可能なように小札で構成され、急所に近い鳩尾板は一枚の鉄板とする例が多い。

弦走草 (つるばしりのかわ)

胴前面に張られた皮革。引き

絞った弓を放った際の弦の走りをよくするための装置。

草摺 (くさずり)

腰の周りに裾広がりの箱形を形成し、騎乗すると大腿部は完全に保護される。

大鎧は楯を取り入れた構造であるため、重量は22〜26キログラムにもなります。徒歩の戦いでも耐えきれない重さですが、馬上では前後の草摺を鞍に覆いかけ、鎧の胴の重量を馬に負担させる仕組みになっていました。

大鎧には重厚感と華麗さ、かつ強力な弓箭をめぐむる合理性がよく表れているのです。